

台湾の森林・林業・風物

東大農 南 雲 秀次郎

私は昨年10月11日から11月17日まで38日間森林資源に関する技術指導ということで台湾大学から要請をうけ、台湾大学をはじめ台湾各地を視察してきました。このとき経験したことのうち、いくつかの印象をこゝで述べたいと思います。外国旅行をするとき、人は誰でもその国に関して多くのことを見聞します。その結果、つくり上げられるその国の印象は、その人の訪問の目的、滞在日数、又その個人の経験の豊富さ、更には偶然に接した事柄などによっていろいろな影響を受けるものと思います。こうした意味で私の印象もごく個人的なもので、はたして正鵠を得たものかどうかわかりません。しかし、私は単なる旅行者としていったものではありません。そして約40日という、ある意味では長期の滞在中、先方では、多くの研究者、技術者と語り合い、更にはその家庭にまで招待され、日常生活にもふれて来ました。こうしたわけで、普通の観光客が短い訪問後に語る印象とは若干の相違があるものと思います。こゝで私のこの国の印象を一言にまとめれば、森林林業の問題、大学の状態、家庭内の問題など、いずれをとってみてもその本質は現在あるいは数年前の日本のそれとほとんど相違ないということです。ただ彼我の政治、経済、風土などの相違によって表面的にはいろいろ違いがみられます。こうした特色をここで表記の題で二、三述べたいと思います。

1. 台湾の国土

台湾は南北に長い島である。その面積は約358万haで、日本の約 $\frac{1}{10}$ で九州よりやや小さい。島の中央や南よりを北回帰線が通っている。この島のやや東よりを北から南へ中央山脈が走っているが、この山脈には3千米から4千米級の高山が約30座もある。この島の気候は複雑で、僅か120Km程度しか離れていない台北市と台中市とで雨期と乾期が逆になっているほどである。標高の高い山々があるため、この島の中に熱帯林から寒帯林(亜)まで存在している。その寒帯林にはスキー場もできているという話である。北回帰線の直下に位置する嘉義市から林務局が経営している阿里山鉄道に乗ると、僅か5時間足らずのうちで熱帯林、亜熱帯林、温帯林と次々に植生が変化してゆくのを車窓から眺めることができる。この国の人口は現在1700万人、一平方キロ当たり475人で日本の291人に対してその密度は高い。

2. 森林・林業の問題

ここで簡単にこの国の森林・林業の現状を述べよう。台湾の林地は約20万haで、国土の約55%を占めている。この林地の約80%が国有林である。これほど大きな割合を国有林が占めているため、台

湾の森林、林業全般で林務局の影響力が圧倒的に高い。例えば、この国の林学会誌の編集も事務局が林務局内にあるほどである。次に林況についてみてみよう。人工林面積は約12%で、日本より低い。いま針・広別に林相を示したのが表-1である。広葉樹林が多いのは熱帯や亜熱帯が多いことによる。

表-1 樹種別林相別面積

針 葉 樹			広 葉 樹		
	面積(千ha)	百分率(%)		面積(千ha)	百分率(%)
総 計	373	100	総 計	1427.3	100
雲杉・冷杉	61.3	16	熱帯広葉樹	612.8	42.93
鉄杉	133.0	35	亜熱帯広葉樹	565.8	39.64
紅松・扁柏	43.0	11	温帯広葉樹	248.7	17.43
松 類	70.2	18			
その他針葉樹	65.5	17			

他方、針葉樹林は主として冷温帯・寒帯に分布する。台湾の林業を考える場合、まず考慮すべきことに治山の問題がある。台湾の山岳は概して急峻であり、夏期に台風などの豪雨に見舞われることが多いため、森林の開発には慎重な配慮が必要である。現在各地を視察すると、多くの河川が砂れきで埋まり細流がわずかに認められるような情景に接する。このことから豪雨時の河川の氾濫の様子が容易に想像できる。しかし、この国の林業発展の最大の問題は林道建設である。現在森林鉄道も含め四輪以上の車の通れる林道はha当り1.46mに過ぎない。このため現在でも高地にある針葉樹林の施業がおくれている。このことは表-2から明らかであろう。

表-2 開発可能及び不能林分

	全 林 地		針 葉 樹 林		広葉樹林その他	
	面 積(千ha)	百分率(%)	面 積(千ha)	百分率(%)	面 積(千ha)	百分率(%)
林 地 総 面 積	1969.5	100	373.0	100	1596.5	100.
施業可能・開発林地	1311.6	66.6	111.9	30	1199.7	75.1
施業可能・未開発林地	581.4	29.5	237.3	63	344.1	21.5
施 業 不 能 地	76.5	3.9	23.8	6	52.7	3.3

最後に森林蓄積についてみてみよう。これは表-3の通りである。総蓄積は約2・3億 m^3 で日本の約10%である。広葉樹の蓄積の方が多いが、これは面積の割合が高いことによる。いまha当り蓄積をみると、115.18 m^3 で、日本の86.5 m^3 より大きい。しかしこれを針広別にみると、針葉樹林274.22 m^3 、広葉樹87.24 m^3 となっている。以上を要約すると、台湾の森林は優良蓄積をはこる高山地帯の針葉樹林と熱帯及び亜熱帯地域の低蓄積の広葉樹林からなっていると概括できる。現在台湾では木材需

要の約90%を外材が占めており、山地保全と並んで森林資源開発は極めて重要な課題となっている。台湾は日本に比べて林木の成長が早い。例えば、スギの生長を比較すると、台湾実験林の地位中の場所平均生長量最大の林齢が30年でそのときの総蓄積は568.5 m^3 となっている。最近、平地林で話題となっている造林樹種である銀ネムは、年平均生長量40 m^3 、5年で主伐できるといわれている。こうした大きな可能性ある林地を将来どのようにして生産力を高めてゆくか現在台湾には研究すべき課題が多数存在する。

表一三 台湾の森林蓄積

	蓄積(千 m^3)	百分率(%)	単位面積当り材積(m^3/ha)
全林地	226846	100	115.18
針葉樹林	102285	45	274.22
広葉樹林	124561	55	87.24

3. 台湾での講義

私は渡航前に講演用として「日本林業の現状と森林計画制度」また、講義用として「林齢空間論」「収穫予定の理論」「戦後日本に於ける plottless sampling の発展」という三題目を用意した。この最後の題目は、実は「戦後日本に於ける測樹学の発展」という講義にしたかったが、時間がなくてまとめきれなかったために選んだものである。講演、講義とも日本語でおこない、台湾大学の楊榮啓教授が通訳をしてくれることになっていた。当初私は日本国内でもこうした話は大変なのに、まして外国人を相手にしたらどうなるであろうかと多少心配をしていた。しかし、これらを済ませた後で私は一つの事実を知った。それはもし適切な通訳者さえ得られるなら、講義は日本人を相手にするより楽だということである。外国人相手の場合、我々は細かい複雑な事柄を伝えることは初めからあきらめてしまう。そして内容をできるだけ簡明にする。会場ではこれを適当に、時間の間隔をあげながら話すことになる。しかし聴衆にその内容を伝えるのは通訳であるから、こうした作業は実は二人の共同作業ということになる。通訳は話の内容を理解し、聴衆がわかるように時には解説を加えながら改めて自分の言葉で聴衆に内容を伝えることになる。勿論、こうしたことが成功するか否かは聴衆の理解力とマナーにも依存する。台湾の人々はこのいずれもよかった。

4. 台湾の人々

私が現地で接した人々は主として大学関係者及びその家族、林務局及び農業発展委員会の技術者、林業試験場の技師達であった。彼等はそれぞれ日本の大学の教官、林野庁や県の技師及び林業試験場の研究者達と感じがよく似ていた。これらの人々は三種に大別できる。i) 中国大陸で教育を受け戦後台湾へ来た人及びその子弟。彼等は現在この国で有力な地位を占めている人が多い。米国に留学し

た経験をもち、英語は堪能だが日本語はほとんどできない。ii) 台湾で生まれ戦前又は戦中に教育を受けた43～45才以上の人々。彼等は概して日本語が堪能である。iii) ii) で述べた人の子弟。戦後米国の影響下で中国式教育をうけ、英語は堪能である。日本に留学した人を除き日本語はほとんどできない。

彼等はみんな親切で、礼儀正しく一様に日本の技術、文化、生活などに興味をもち、尊敬の念を表明していた。日本の林学の動向に詳しい人々も多かった。

台湾各地の視察には揚栄啓教授や林子玉教授らが同行してくれたが、林務局では必ず日本語のできる技師を我々の案内者としてつけてくれた。これらの人々は上述のii) に概当する人々だった。彼等の中には戦後北京語の学習に苦労した人もおり、日本語が母国語ではないかとさえ思われる人がいた。また思考や行動様式が日本人そのものと思われる人も多かった。しかし台湾は現在急速に社会構造が変化しつつある。その背景には著しい経済発展があるが、具体的には上述のii) の世代の人々が急速に社会の一線から消え、代って戦後の教育を受けたiii) の世代の人々が増加してきているからである。地理的に近いこともあり、台湾では経済、文化などの面で依然として日本の影響力は強いことは事実である。街には日本の商品が多く陳列され、喫茶店やレストランでは日本人がいなくとも日本の流行歌が流れ、台湾式日本料理が好まれている。しかしこれは丁度日本が米国の影響を強く受けているのと同様で、今後は日本人的発想のできる知日家は急速に姿を消してゆくものと思われる。しかし彼等はいずれも陽気で話し好きで親切である。これは世代を越えて存在する台湾の人々の特性であろう。

5. 台湾の生活

日本を離れる前、医師から胃炎なので食事に十分注意するように言われた。台湾では連日のように食事の接待を受け胃を休める暇がないほどであった。しかし不思議に胃は正常に働き食事は楽しかった。私は改めて胃炎の原因は環境にあることを知った。台湾大学では暫らく机をあてがわれ、講義の用意などをしたが、日本であれほど敏感に感ずる電話のベルが全く気にならなかった。帰国したら再び胃の調子がおかしくなった。

台湾では胃病が少ないようである。これは日本に比べて生活がのんびりしているからであろう。その一例を台湾大学にとってみよう。教員はほとんど家具付で無料の官舎に入居している。ここに、朝スクールバスが迎えに来る。昼、再びこのバスは昼食と昼寝のため彼等を家庭に送り、1時間半後に迎えに来る。したがって彼等は弁当の必要はなく、ラッシュアワーなどは経験しない。大学の管理運営には直接彼等は責任がなく、学生は真面目で礼儀正しい。俸給が安く研究費が少ないという不満はあるようだが、日本と比べて相対的に大きな差はないようである。ただ家庭内では子供達はピアノの稽古や学習塾通いやらで休むひまがなさそうである。きっと彼等の中に胃炎で苦しむものがあるような気がする。

6. 台湾の自然

台湾へ来たとき、台北は丁度東京の5月中旬の陽気であった。その後台湾の最南端のガランプまで旅行したが嘉義以南は完全に真夏の気候だった。この国にも冬があり台北では10°位に温度が下がることがあるということであるが、南部では寒さ知らずで、これは私にとってたまらない魅力であった。しかし暫らくしてから台湾の人々に気の毒なことが一つあることに気がついた。それは季節の変化がはっきりしないことである。東京に住む我々は、2月中旬、急に日ざしが強くなり、街中が光の洪水と言われるほど光であふれ、春が近づいたことがわかる。また、4月になると木々の若葉が萌え出でる。このようなとき、我々は春の到来の歓びを全身に感ずることができる。しかし、台湾にはこうした歓びは少ないのではないだろうか。